

(PDF版・3の4)『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」「一 神の用意」(115-231頁)

「一 神の用意」

われわれは、「ただ〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理そのものの中に立ち・真理を通して呼び出され、証明され、導かれた者としてだけ、……力強く、有効に、したがってわれわれ自身とほかの者たちを事実啓発する仕方
で、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理そのものに関りを持ち、真理そのものを証拠として引き合いに出すことができる……。しかし、「われわれは、自分を〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理の中に置き、したがって〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理を通して呼び出され、証明され、導かれる者となる力を手に握ってはいない」。したがって、「もしもわれわれがそのような者であるとするならば、それは、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理そのものを通してである」。したがってまた、「もしもわれわれがそのような者でないとしたら、われわれは、ただ〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕真理そのものを通して、そのような者となることができるだけである」。したがってまた、われわれが、そのような者となることができるのは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、ただ神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉——すなわち、客観的な「存在的な〈必然性〉」としての客観的なその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」と主観的な「認識的な〈必然性〉」としてのその「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（換言すれば、「啓示と信仰の出来事」）を前提条件としたところの、客観的な「存在的な〈ラチオ性〉」としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的な〈しるし〉」）、詳しく言えば人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としてのその人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」では決してなく、徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、イエス・キリストにおける神の自己啓示としての、「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一

体の神の、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在における第二の存在の仕方における言葉の受肉（「イエス・キリストの<人間性>」）としての「<存在者>」（「最初の起源的な支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性、「聖礼典的な実在」）の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の実在」としての第二の形態の神の言葉（「啓示との<間接的同一性>」、啓示との区別を包括した同一性において存在しているその最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」）である聖書、詳しく言えばイエス・キリスト自身によって直接的に唯一回の特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された「預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、換言すれば「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのくまことの神性」——すなわち「<権威>」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのくまことの人間性」——すなわち「<自由>によって賦与され装備された権威と自由を持つ」「預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、それ故に第三の形態の神の言葉である「教会に宣教を義務づけている」「聖書は、先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としてのイエス・キリストと共に、教会の宣教における原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕である」ところの聖書、その「教会に宣教を義務づけている」聖書を「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいて自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の<客観的>な信仰告白および教義Credo（「啓示のくしるし」のくしるし）としての教会の宣教、詳しく言えばその聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」<教会>教義学の問題、<福音主義的な>教義学の問題）と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において、その<教会>教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題）——すなわち、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、全世界としての教会自身と世の全ての人々が純粋なキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝えという連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行く教会の宣教に基づいてだけである。

前段における「難問と直面して、神の認識可能性を問う〔教会の一つの補助的機能としての、教会的な補助的奉仕としての〕神学的探究」の「中絶や指示」は、「その難問と直面して、……〔あたかもわれわれ人間が、生来的に自然的に〕真理の中に立っており」、それ故に「真理を自由に処理し得るし」、それ故にまた「そのまま啓示と関りを持つたり、啓示を引合いに出すことが許され、啓示を引合いに出すことができるかのよう」に、それ故にまた「真理は、とにかくかなり簡単に手に入れることができるかのよう」に、安心してその道を進み、そのまま考えを進めていったらよいという「誤謬の出現を許すことを意味し得る」。したがって、われわれは、「難問と直面して、神の認識可能性を問う〔教会の一つの補助的機能としての、教会的な補助的奉仕としての〕神学的探究」を、その「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っているイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「神が〔われわれのための神〕として」〈われわれにとって〉認識可能であり、それ故に「神は認識可能であり」、しかも〔「神の領域の中での神ご自身の真理」の中で、神がご自分を「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「神の〈内〉三位一体的父の名」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であると自己認識、自己理解、自己規定した内的な真理の中で、自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「自己自身である神」としての「三位一体の神」のその内在的な対象性の中で、すなわち神がご自分を「自己自身である神」としての「三位一体の神」のその「根源」・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源である」と自己認識、自己理解、自己規定した内的な真理の中で]神ご自身が真理であり給うことに基づいて認識可能であるということは、神の〈恵み〉を通して起こるといふ想起でもって続けて行くことにする。

「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位一体の神」は、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における第二の存在の仕方である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」）イエス・キリストにおいて、〔神とは全く異なる〕他者との交わりの中に赴き、それ故に「自分自身を他者に相対して愛する者として示し給う限り」、「ご自身と……被造物の間に直接交わりを造り出し、保ってゆくことである」から、そして

そのことは「神の恵みの賜物である」から、そしてまたその「神が恵みを与え給うことの原型は、神の言葉の受肉〔その内在的本質である神性の受肉ではなくて、その「外に向かつて」の外在的な第二の存在の仕方における言葉の受肉〕、神と人間が＜イエス・キリストにあって一つ＞であることである」から、われわれは、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、「**神が**〔自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な「自己自身である神」としての〕**ご自身の中であり給う領域、神がご自身を認識し給う神自身の可能性にまで戻って行くことが問題であった時に**」、「**真理の啓示の中で生起する神的な介入に合わせて行く代わりにその神的介入に抵抗する**」ことに対する〔イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力に信頼しない」(『教会教義学 神の言葉』) ことに対する〕、「すなわち、われわれの思想を、その神的介入に合わせて行く代わりに、その神的介入を無視してその傍らを通り過ぎて行く」ことに対する、「その真理の啓示の中で生起する神的介入の力と有効な働きの中で神認識にまでくる神の啓示においては」、「『＜神の恵み＞』ということが何を意味しているかを、……〔その「真理の啓示の中で生起する」〕**神的な『介入』が問題であるという比喩的表現にもう一度戻る時に、最もよくはっきりさせることができる…**」。「もしもその真理の領域がわれわれにとって閉じられていない時」、すなわち「われわれにとって啓示されている時〔換言すれば、われわれにとってイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて開かれている時〕」、すなわち「真理はわれわれにとって開かれているということ^をわれわれが用いることが力と効力を持っていて、決して空虚な思想の運動でない時」、「そこでは、確かに＜特別なこと＞が問題である」。したがって、ここでは、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づかないところの、自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としてのその人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」を目指す「空虚な一つの思想の運動が問題であるということが、あり得ることなのである。言い換えれば、人間が、彼が神認識だとみなす運動の中で、実際はただ一人ぼっちであり、実際は〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神と全く関わっておらず、ただ自分自身と関わっているに過ぎない」、「ただ＜自分自身の本質と存在の絶対化＞と、そのような本質と存在が無限へと投影された投射と、自分自身の栄光の映像をうち立てることと関わっているに過ぎない」という「空虚な一つの思想の運動が問題であるということが、あり得るのである」——「この方向をとってなされる思想の運動は、対象のないものであり、単なる遊びであり、神認識として全く自己欺瞞に過ぎないが故に、空虚であるであろう」。したがって、その空虚な思想の運動は、前期と後期の総体性において思惟し語ったハイデッガーから、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受

け入れた方がよい』』と「揶揄」されてしまう。また、フョイエルバッハからは、「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする。動物は自分以外の他の個体がいなければ類の機能をひとつもはたすことはできない、しかし人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる」、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」、その時には「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」、それ故にその時には「（中略）神の啓示の内容は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての〕神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した〔換言すれば、自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としての「存在者レベルでの神」から発生した〕……。 （中略） こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……。』」、それ故にその時には「（中略）神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」（『キリスト教の本質』および『フョイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）と根本的包括的に原理的の批判されてしまう。「われわれは皆」、「そのことをよく知っているのである」。このような訳で、そのことから対象的になって距離を取れていない時には、そのことをよく認識し自覚していない時には、「われわれが自分たちの神認識と呼んでいるすべてのことが、いわば〔フョイエルバッハが指摘しているような〕＜自然的な＞、一般的な、通常の側面である〔「ワタシハカク欲シ、カク命ズ」という「対象のないものであるが故に〔換言すれば、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神という対象を持たないが故に〕、空虚な」＜自然的な＞、一般的な、通常の側面である〕」——「この側面から見た場合」、「われわれは、……〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての〕神と関わっておらず、むしろ根本においては、われわれ自身と関わっているのである〔換言すれば、われわれ自身の人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としてその人間の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者レベルでの神」と関わっているのである〕」。

「さて、人は、次のことによく注意せよ」——「**形式的に見て、われわれの神学的な神認識も、またすべての形で三位一体の神と関わっており、〔第二の形態の神の言葉である〕聖書と〔第三の形態の神の言葉である教会の〕教義によって導かれ規定され**

たわれわれの思想の動きも」、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいていない限り、すなわち客観的な「存在的な〈必然性〉」と主観的な「認識的な〈必然性〉」を前提条件としたところの、客観的な「存在的な〈ラチオ性〉」と主観的な「認識的な〈ラチオ性〉」に基づいていない限り、「〔ワタシハカク欲シ、カク命ズ〕という「対象のないものであるが故に空虚なものである」] その自然的な、一般的、通常の側面……を持っている」ということに注意せよ。したがって、「われわれの神認識が、〈ただ〉その側面〈だけ〉を持っているので〈ない〉」時、そのことは、決して自明的なことではないのである。すなわち、「われわれの神認識が、……そこから見て、われわれは、ただわれわれ自身と取り組んでいるだけでなく、実際にまた神と取り組んでおり、それから実際に神と取り組んでいるが故に実際にまたわれわれと取り組んでいる側面を持っている時、そこでは、確かに一つの特別なことが問題である」。そこでは、教会の宣教およびその一つの補助的機能としての神学における思惟と語りが、「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではない」のであるから、神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉——すなわち、神の側の真実としてある客観的な「存在的な〈必然性〉」と主観的な「認識的な〈必然性〉」を前提条件としたところの、客観的な「存在的な〈ラチオ性〉」と主観的な「認識的な〈ラチオ性〉」という「一つの特別なことが問題である」。「そこでの事情は、そこで出来事となって起こった特別のことの中で、特別なことと共に、一つの全く新しい側面が開かれた」という「一つの特別なことが問題である」。

「プロテスタント神学が、一九世紀の終りに、……表向きは偽りの形而上学に対して戦いながら、しかし実際には現に語り行動し給う神のリアルな現臨に対して戦いながら、結局は、人間の宗教的な生の単なる歴史的な記述と心理学的分析に過ぎなくなってしまおうとしていた啓示倦怠感に襲われ、ほとんどそれによって全く支配されてしまったということは、一体どうして起こったのであろうか」。近代〈主義〉者としてイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力に信頼しない」シュライエルマッハーにおいては、「信仰も、人間実存の歴史的存在の一つの在り方として理解される。神学における近代主義的思惟は、人間が、誰かによる呼びかけを受けることなしに、（中略）人間が自分を相手に自分だけでひとりごとを言っているのを聞く」、「教会とは、『ただ自由な人間的行為を通して発生し、またただそのような自由な人間的行為を通して存続することのできる共同体』であり、『敬虔性〔「絶対依存感情」〕と関連した共同体』である」、それ故に「近代主義にとって

は、宣教は、『教会』と呼ばれる人間的な共同体の一つの必然的な生の表現となる」。シュライエルマッハー等近代<主義>的プロテスタント主義的神学者は、「人間精神が生み出したものを問題とする限り、啓示を問おうとしないで人間精神の自己理解を第一義として聖書の中でも神話を問う」歴史<主義>的神学者を含めて、「人間の精神的な促進のために、自分と彼らに共通な宝庫からくみ取りつつ、この宝庫をさらに豊かにするために、自分自身の歴史と現在の解釈を表現しようとする。すなわち、自己表現としての宣教を企てる」（『教会教義学 神の言葉』）。しかし、「神の認識可能性は、[「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われぬ単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の] 神ご自身によって、[「われわれのための神」としてその「外に向かって」の外在的な「失われぬ差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質）における起源的な第一の存在の仕方、すなわち啓示者・言葉の語り手・創造主である] 父および [その第二の存在の仕方、すなわち啓示・語り手の言葉（起源的な第一の形態の神の言葉）・和解主である] 子の中で、[その神的愛に基づく父と子の交わりとしての第三の存在の仕方、すなわち「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済主である] 聖霊を通して具体的に実現されたが故に、「詳しく言えば、直接的な仕方ではないが間接的な仕方で、しかしそれだからと言って決してそれだけ現実性において劣った仕方ではなくリアルに、参与するようになり参与し続けるが故に」、「われわれは、[類的機能を持つ自由な人間の理性的思惟を駆使しての、あるいは際限なき人間的欲求を駆使しての] 抽象的な可能性として神の認識可能性について語ることはできない」。その「一九世紀の終りの神学」は、「結局、[第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の] 啓示に逆らっていたのであるが」、「哲学および神学の世界での最上の最も深淵な精神が、まさに神の啓示と現臨を人間が [類的機能を持つ自由な人間の理性的思惟を駆使しての、あるいは際限なき人間的欲求を駆使しての] 自分と取り組んだ活動の最後の最高の成果 [人間的な自然（人間の観念的生産物）としての成果] として理解し、そのような主張として舞台にのぼらせようと骨折った [「シェリング、ヘーゲル、シュライエルマッハー」の] 一九世紀前半の、天国を襲撃しようとする観念論に倦怠感を感じていた」、「哲学と神学、そもそも世は、一九世紀半ばの前と後の時代において、観念論的な運動のまさにその最後の最も深淵な成果に対して、まさにその神信仰に対して、まさに悲哀を催させるような仕方<倦怠> [「啓示倦怠感」] を感じるようになっていた」。その時、「懐疑と否定の波浪が襲った相手」は、「ただ単に [「第一の侵害行為」としての] 神学的——哲学的形而上学の厚かましく考え出された神を信じる信仰だけでなく [すなわち、人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（人間の観念的生産物）としての「存在者レベルでの神」としての神を信じる信仰だけでなく]」、「第二の侵害行為」としての「聖書の啓示の神

そのものを信じる信仰であった〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神そのものを信じる信仰であった〕。

「第一の侵害行為は、第二の侵害行為を、自動的に招きよせてしまったのである」。

「思弁的な体系が崩壊した後は、哲学と神学にとって、実証主義的な歴史主義と心理主義以外のものは残っていないように見えた」——「この実証主義への不満足感が長きにわたって抑圧されたままいることができなかつた時」、「エルンスト・トレルチのような者が盛んに活躍していた一九一〇年頃」、「そのような実証主義の最も不屈な代表者たちに対して、……〔ただ絶望的な〕観念論的形而上学の新たな勃興の可能性が論議されるということが、一時起こつた」。「しかし、そのような可能性は、もっともな理由からして、……第二のヘーゲルや第二のシュライエルマッハーは見出されず、ただあの時代の無力な亜流たちと自尊心の強い者だけが見出されたのであるが、決して実現されはしなかつた」、その復古と逆行を時代と現実が許さなかつた。「事情がそうであつたということはよいことであつた」。何故ならば、そのような「悪循環」においては、「苦痛な、危険な幻滅に到達するのが関の山であつたからである」。

そうした歴史的な過程を念頭に置けば、「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかつた」、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかつた」、またその場合、その混合、混在において、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」、「キリスト教哲学は、それが哲学であつたなら、それはキリスト教的ではなかつた。それがキリスト教的であつたなら、それは哲学ではなかつた」（『教会教義学 神の言葉』）。したがって、われわれは、神学も類的機能を持つ人間の理性を使つての知的営為ではあるが、イエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉からして、教会に宣教を義務づけている第二の形態の神の言葉である聖書は、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト共に、教会の宣教の思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準であることからして、「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、〔教会の宣教における一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての〕神学は哲学的試みが終わるところから始まる」し、その「神学は方法論的には、ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」（『バルトとの対話』）ということを経験し自覚していなければならないのである。